

いぶき34号 平成25年11月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第32回：エンゲルベルト・ケンペル（1651～1716年）



「“宗教的世襲皇帝”の王朝は、キリスト以前の660年がその始まりである。・・・この年からキリスト紀元1693年にいたるあいだ、すべて同じ一族に属する114人の皇帝たちがあいついで日本の帝位についた。彼らは、日本人の国のもっとも神聖な創健者である『テンショウダイシン(天照大神、あまてらすおおみかみ)』の一族の最古の分枝であり、彼の最初に生まれた皇子の直系である等々のことを、きわめて誇りに思っている。」

【出典：『江戸参府旅行日記』斎藤信訳（東洋文庫303 平凡社）】

ドイツ北部のレムゴーに牧師の息子として生まれたケンペルは、幼少期の三十年戦争や魔女裁判などの経験から、平和や安定的秩序を求めようになったと云われています。ラテン語学校で学んだ後、哲学、歴史、語学などさまざまな勉強を続け、1683年にスウェーデン国王カール14世の使節団に医師兼秘書として随行して、ロシア、シルワン(現アゼルバイジャン)、ペルシア、オスマン帝国(現トルコ)、ペルセボリス(現イラン)など地球を半周する大旅行を行っています。さらに、イランで使節団と別れてオランダ東インド会社の船医としてインドに渡り、1690年(元禄3年)にシャム(現タイ)を経由して来日し、出島に2年間滞在しました。この際の日本での見聞をまとめた遺稿が1727年に英訳され『日本誌(The History of Japan)』として出版され、フランス語、ドイツ語、オランダ語にも翻訳されて、知識人の間で一世を風靡しました。ゲーテ、カント、ヴォルテール、モンテスキューらも愛読し、これが19世紀のジャポニズムに繋がったと云います（『江戸参府旅行日記』は一部を翻訳して1979年に出版されたものです）。

上記の文章からわかるように、17～18世紀のヨーロッパ人は、中国人と同様に、「日本人は万世一系の皇統であり、異例なき最古の一族である」という概念を受け入れていました。『日本書紀』に書かれた日本建国の日付を、西暦に計算し直して紀元前660年としたのはヨーロッパ人なのです。わが国は、他国のように何処から誰かがやって来て「建国」されたものではなく、遠い遠い悠久の昔にここで国が肇められた「肇国」であり、さらに云えば国という概念すらなかった古(いにしへ)に神の御意志によってはじめられたのが日本であることを、私たちは再認識して子供たちに伝えて行かねばなりません。

【参考：(1) <http://ja.wikipedia.org/wiki/エンゲルベルト・ケンペル>、(2) 『古代日本史 - 神武天皇・古代和字-』岩邊晃三/富永浩嗣著（錦正社）】

平成 25 年 11 月 18 日 転載